わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ―105

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

殺人は増えているか

昼間テレビをつけていると、韓国ドラマと過去の2時間ドラマの再放送がものすごく多いことに改めて驚かされる。テレビ界の衰退が指摘されて久しいが、特に日中のテレビの内容は実に「どうでもいい」もので占められている。

2時間ドラマでは、たいてい誰かが殺されている。それなりの理由があるのかないのかわからないが、殺人のシーンが氾濫しているように見えてしかたない。お茶の間にいるこちら側にとっては、あくまでドラマはドラマ。別世界のことであり作りごとと割り切っているから耐えられるのだろうが、冷静に考えてみれば、精神衛生上甚だよろしくない。ナイフでざっくり、鈍器でガツン、銃でドン！と、方法はともかく、人がバタバタと死んでいくのだ。

現実の殺人状況はどうなっているか、少しばかり数字をひも解いてみた。

この種の統計は、厚生労働省による「人口動態」と警察庁による「犯罪白書」にある。注意が必要なのは、厚生労働省は人口の動きを見るのが主目的であるために、殺人による「死亡者」をカウントしている。それに比べて警察庁は「殺人事件」の件数をあげている。殺人事件の被害者がすべて死亡するわけではないので、「死亡者」は「殺人事件」より少なくなる。ちなみに、厚生労働省による2009年の死亡者は「474人」と、近年増えている気配はなく、むしろ長い目で見れば若干減少傾向にある。前年度の2008年は546人、ここ15年でもっとも多かったのは1998年の808人で、一日に1～2人が誰かに命を奪われている計算になる。これを多いとみるか少ないとみるか、は判断の違いによるだろうが、他国と比較すると遥かに小さな数字ではある。

一方、警察庁発表の殺人事件の件数は、2008年が1、297件で、前年より少し高めではあるが、それでも2003年1、452件より少ない件数となっている。「殺人事件の認知件数」とわざわざ表現していることから、認知されていない、つまり表面化していない殺人事件もそれなりにあるということなのだろう。

それにしても、思いのほか、殺人もそれによる死亡者も目立って増えてはいない。やはりドラマは基本的に創作であり、現実に即したものではなさそうだ。

しかし、ちょっと納得のいかない気分である。何故か。

人が人を殺めるというのは、尋常なことではない。そこにどれだけの理由があろうとも、狂気に囚われて凶器を振りかざす人間の心理状態は文字どおり「狂っている」。かつての殺人事件は、その背景に貧困が見え隠れしていた。あるいは怨恨である。が、最近目立つのは、例えば実の母親が我が子を虐待で殺してしまうといった、身内による家庭内殺人である。調べてみると虐待件数自体、平成13年度より増加し続けていることがわかった。幼子が実の親の手によって命を絶たれる――。殺人による全体の死亡者数は減っていても、ケースごとにみていくと、その内容はむしろ悲惨さを帯びているようにも思う。

殺人は少ないが自殺者数はトップレベルにあり、しかも子どもの虐待件数は増加し続けている。憂えるかな、これが今の日本の現実である。

イラスト・三浦義雄